

法隆寺東院夢殿1/30断面模型

Hohryuji Temple Tohin Yume-dono 1/30 section models

戸嶋 みずほ
Mizuho Tojima

Octagon circular halls, by the fact that the models of the Hohryuji temple Tohin Yume-dono which is called the oldest most superior is produced, the structure and technology are learned.

Keywords : model, circular halls, historical building
模型、円堂、歴史的建造物

はじめに

法隆寺東院伽藍は金堂などがある西院伽藍から少し離れた場所に位置しており、行信僧都が聖徳太子の住んだ斑鳩宮跡の地が荒れ果てているのを嘆き、739年に建立したと伝えられている。

夢殿はその東院の正堂であり、現在国宝に指定されている。また、現存する八角円堂の中で最も建立が古く、それらの代表作として広く知られている建物でもある。

私は、模型を制作し同時に研究することで、八角円堂について、より理解を深めることを目的とした。

模型は主に檜を使い、構造がわかりやすくなるように骨組みのみの軸組み断面模型にした。全体の1/2づつ、それぞれの断面模型が建立当初と現状を示し、相違点が明確にわかるようになっている。

夢殿の構造

夢殿は創建以来たびたび修理を受けている。特に鎌倉時代に大きく改造されており、現状の夢殿は建立当初とかなり異なった姿となっている。

現状の基壇は二重になっているが、当初は一重だったと考えられている。それは現状のまま軒を創建当初の形式に復元すると、壇上へ直接雨が落ちることになるし、『古今目録抄』に「石壇ハ三重ナリ。最上ヲハ名須弥壇。」とあり、二重の仏壇を加えると三重になるからとされる。

基壇に置かれた礎石の上には八角柱が内側、外側にそれぞれ8本ずつ立っており、側柱の間には角柱が1本ずつ立っている。柱はいずれも「内転び」の形式になっており、現状だけ内外に飛貫が入る。

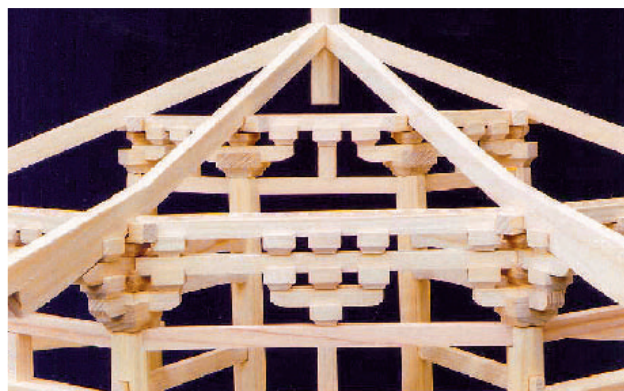
現状の斗栱は側通り本柱、間柱上とも、三斗組で、巻斗が二通り重なり、通肘木と矩形の桁を受けている。また、これに応じて入側柱と繋ぐ虹梁も上下二重になっており、下の虹梁は先端に巻斗をのせ、それがさらに上の虹梁を受け、上の虹梁はその先端を延ばし直接隅木を受けている。入側柱上では桁のみが隅木を受け



現状 夢殿



現状模型 全体



現状模型 斗組部分

ている。

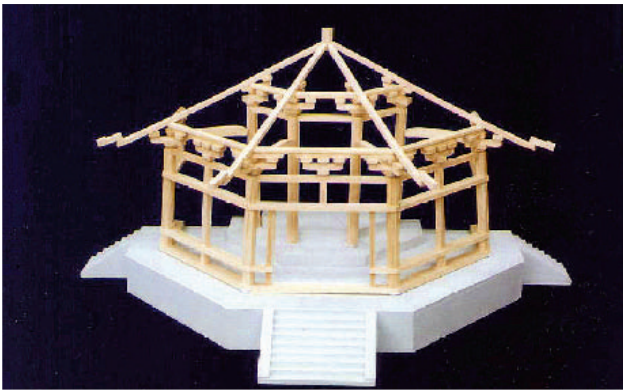
しかし当初は、桁の断面が八角形で、笹縁を持つ三斗実肘木で支えられ、実肘木の端には線形が付けられ、肘木は現状よりも長く、間柱上にも同様な三斗実肘木が存在していた。また、繫虹梁は現在下方虹梁にあたるもの1本のみ存在し、現状2本ある虹梁の中間部に位置した。そして、先端を現状より長く笹縁のない肘木につくり、巻斗をのせて隅木を受けていたのである。入側柱上の桁は側通り同様、八角形断面で、桁と方斗との間に上り勾配に置かれる肘木が咬まれて、その外端は隅木を直接受け、内端には斗を置いて隅木を支えている。

現状の垂木は当初より太く、軒の出も深く、飛檐垂木は長く、先が細くなっている。また、小屋組内部には桔木が入れられて、厚い屋根となっている。

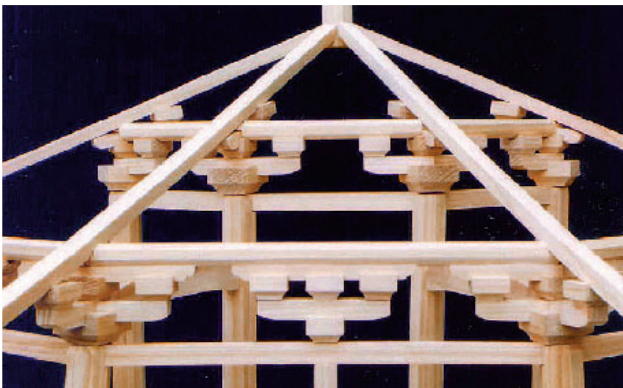
つまり、全体として現状は建立当初に対し、柱の内外の繋ぎが多くなり、屋根の勾配がきつくなっているのである。



建立当初夢殿を1/2で復原した長野県長福寺の「信州夢殿」



建立当初模型 全体



建立当初模型 斗組部分

おわりに

一つ一つの部材が小さく、それらが八角形を構成するという
ことで、機械で行う作業よりも手作業が多くなり、大変だった。し
かし、この模型を制作することにより、機械などなかった当時の
人々の苦勞や技術力の高さを改めて実感することができた。

参考文献

法隆寺國寶保存工事報告書 第九冊
國寶建造物法隆寺夢殿及東院廻廊修理工事報告
法隆寺國寶保存事業部 1943

浅野清

昭和修理を通して見た 法隆寺建築の研究中央公論美術出版 1983

大西修也

小学館ギャラリー 新編名宝日本の美術1 法隆寺
株式会社 小学館 1990